

巻頭言

2019年の新潟大会に向けて

越仲 孝文

(NEC バイオメトリクス研究所)



全国大会担当理事・実行委員長として、来年の第33回全国大会の準備を進めています。すでに6月の鹿児島大会交流会や9月会誌会告でご案内したとおり、次回大会は2019年6月4日(火)～7日(金)、新潟県新潟市の朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター・万代島ビル)で開催します。

私は今なお、AIブームの真っ只中にいます。2017年の名古屋大会の参加者数は驚異の2500人超えで、しばらく破られることのない大記録と思われました。ところが、翌年の鹿児島大会がこれをあっさりと塗り替え2600人を超えました。次回の開催地については名古屋大会の直後から検討してきましたが、朱鷺メッセは十分なキャパシティを有し、たとえ鹿児島を超える参加者があったとしてもゆったりと議論できる場を提供できます。また、2015年の函館以来4年振りの東京以北での開催となります。参加される皆さんには新たな気分で、爽快な初夏の気候のもと、日本海にほど近いウォーターフロントでAIの将来について語り合っただけのことと思います。

さて、上述したように近年の全国大会は、AIブームの後押しを受けて前例のない活況を見せています。特に、大学AI研究者が主体であった研究の場に、それまで縁遠い存在であった分野外の研究者、企業系のITエンジニアやコンサルタント、マーケタといった人々が入ってくることで研究のすそ野が広がり、さまざまな見地でさまざまな議論が活発になされるようになりました。一方で、参加者の声を聞くと、「多数の発表があるが玉石混交、当たり外れがある」といった意見が依然として多く、論文品質のレベルアップが求められています。ましてや、近年は米国や中国などの諸外国が豊富な研究人口と資金力をもってAI技術強化を推進し、競争力を高めています。我が国AI技術の相対的な地位低下が危惧されており、世界の中で日本のAIのプレゼンスを高める働きが当学会にも求められています。

このような外部環境を鑑み、次回大会では、国内外の優れた研究成果を英文論文として発表し、世界に発信する「国際セッション」を新設します。プログラム委員長の大澤幸生先生(東京大学)が熱い思いをもって、これを強力に推し進めているところです。世界の第一線で日々戦っておられる研究者の皆さん、国際セッションへの投稿をお待ちしています。

2017年から始めたインダストリアルセッションなど、産業界の参画も引き続き積極的に推進します。周知のとおり、研究開発から実用化に至るリードタイムは昨今、オープンソースの普及などにより画期的に短縮され、基礎研究と応用研究というような線引きは意味を失いつつあります。産業界の関与はこの分野の発展に不可欠です。企業の皆さんの積極的な参加、貢献を期待します。毎回好評のオーガナイズドセッション、2018年から始めた企画セッションも継続、もちろん基調・招待講演も、海外からのゲストを含む豪華講師陣が登壇予定です。

先日、現地視察の機会に、新潟駅前の居酒屋で当地のB級グルメ「鶏の半身揚げ」をいただきました。これが、外はカレー味でカリッと香ばしく、かつ中身はジューシーでふっくらホクホク。米どころ、酒どころだけではない「新潟メシ」の奥深さを体感しました。皆さん、ぜひ新潟にお越しください。新潟の美味しい食と酒を楽しみつつ、AI技術の今日、明日、明後日について心ゆくまで議論しようではありませんか。



図1 会場となる朱鷺メッセ(新潟県新潟市)



図2 空から見た会場と日本海